



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第5巻第
10号)

AUTHOR(S):

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第5巻第10号). 泌尿器科紀要 1959, 5(10): 1100-1100

ISSUE DATE:

1959-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111829>

RIGHT:

編集後記

泌尿器科独立の問題に於て、理論的な面と実際の面とがある。先ず理論的には、学問としての泌尿科の独立性は今更茲に述べるまでもなく当然の事である。従つて泌尿科の専門家は是非とも必要である。患者の数が少なければ専門家の数も少くともよいが、それが必要である事は間違いない。また仮りに経済的に厚く報われる事がなくても専門家は必要である。次に泌尿科専門医の進むべき方向が問題となる。一つの考え方として、泌尿科だけの領域内に閉じこもらずに、一般外科の中に合流してゆくというのがある。またこれと逆に、泌尿科の立場をなるべく厳しく守り、本当の意味の専門家になるという考え方もある。泌尿科が今日まで歩んで来た経路から考えると、以上二つの考え方の内の前者は矛盾する。遠くは耳科、眼科等が、近くは整形外科も外科から分離したように、泌尿科も普通の外科から離れるのが合理的であろう。但し泌尿科に関係ある領域を拡大してゆくことは必要である。

次に実際問題として、先ず大学に泌尿科が独立する事に就て考えると、今日までに既に独立している講座の状態から類推して、大学の存するほどの都市にては、泌尿科講座の独立は無理ではないと思われる。入局者は当然あつてよいし、患者も相当にあり、経理的にも成り立つてゆくと考えられる。即ち大学である限りは泌尿科独立は可能である。次に泌尿科を専門としても就職口はあるかという点であるが、総合病院には今後は泌尿科を設置するように努力して領域を開拓してゆけば、就職口も開けてゆくであろう。元来泌尿科専門家の数は多くないから就職口もあまり多くなくてもよい筈だ。次に将来開業出来るかの点である。従来の泌尿科開業は淋疾を主な対象としていたが、現在では泌尿科自体の内容が大いに変わり、はるかに大規模なものになっているので、個人開業では無理であり、泌尿科専門の病院、総合病院或は大学病院等で取扱わねばならぬ。従つて将来個人開業を志すことは特殊の場合を除いては無理であり、結局は大学とか大病院の勤務医を目的とする事になるであろう。このような事情は泌尿科に限らず、他の科、例えばX線科、麻酔科等にもあるであろう。

要は、数は少なくとも本当の泌尿科専門医が充分な設備の下に高度の診療を行うことが第一義である〔昭和34年10月〕。

購読要項

1. 発行は毎月(年12回)とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金100円、払込みは振替口座番号京都 4772番 泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名(フリガナ)、住所(雑誌郵送先)、勤務先、職地位、自宅開業の別、送金方法を御記入の上編集部宛。

投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他。寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。
例。中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 : 527, 1941.
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の題名、所属機関名、ローマ字著者名を付け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は申受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁 500円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別冊20部を無料贈呈。それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は編集者が行うが希望により著者校正とする。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。